

## バナナ医療監修ウラ話 その1 「ウォータートラップ、つけるのかよ」

予告編などでも出ていますが、映画の途中で鹿野さんは気管切開の手術を受けて人工呼吸器を装着します。

舞台が1994年ですので、その当時よく使用されていた人工呼吸器の中には、すでに製造中止となっているものもあります。

鹿野さんが在宅で使っていた人工呼吸器はPLVという呼吸器ですが、これも今は製造中止になっています。当院でも、何名かの患者さんがPLVを使用されていましたが、製造中止に伴い、数年前に他の人工呼吸器への切り替えを行いました。現存する呼吸器ではほとんど見かけなくなったのですが、PLVは「ピストン式」の呼吸器で、独特な作動音を発します。現在は「ブロアー式」のものがほとんど。車に例えるなら、ピストン式が通常のエンジン、ブロアー式がマツダのロータリーエンジンという感じでしょうか。あれ？余計わかんなくなった？

映画の美術部さんがその貴重なPLVを入手してくださり、医療機器監修の方と相談しながら、それぞれのシーンに合わせて呼吸器の回路等を組んでいます。

気管切開をして人工呼吸器を装着すると、問題になるのは「気管内の乾燥」です。通常、人間が呼吸をするときは鼻から空気を吸い込んで気管や肺に送るのですが、その際に鼻腔粘膜で加湿されるため気管が乾燥することはありません。しかしながら、気管切開をして人工呼吸器を装着すると、空気は鼻を通らずに気管カニューレから直接気管内に送られるため、気管内が乾燥してしまいます。

そこで使用するのが「加温加湿器」。人工呼吸器と気管カニューレの間に、精製水の入った釜を置き、それを「加温」することで人工呼吸器の回路を通る空気を「加湿」します。ただ、あまりに加湿してしまうと、水滴が気管内に入ってしまうことがあるため、加温加湿器と気管カニューレの間に余分な水分をとる「ウォータートラップ」という器具を入れます。

この加温加湿器、移動中に使うと釜にたまった水が回路内に入ってしまうことがあるのと、作動に電気をたくさん使うため、外出中に使うことはあまりありません。そこで、加温加湿器の代わりに使うのが「人工鼻」です。文字通り、鼻の代わりに空気を加湿するための器具で、気管カニューレに近いところに付けます。成人の方では、自宅にいるときもずっと人工鼻を使っている方も多いのですが、鹿野さんは「自宅では加温加湿器、外出中は人工鼻」というスタイルだったようです。

問題になったのが、外出中のシーン。

鹿野さんは外出時、電動車椅子の背中に人工呼吸器をのせ、そこから出る呼吸器の回路を鉄の棒(アームと言います)で固定しながら右肩の上を通して首のところにある気管カニューレに接続しています。その際、外出中ということもあり人工鼻を付けているのですが、なんと「ウォータートラップ」も回路に付けたままになっているのです。そのように使っている写真が、たくさん残っています。

前述の通り、ウォータートラップは「加温加湿器で加湿し過ぎたときに余分な水分をとるためのもの」なので、外出中で加温加湿器を使わない時は不要です。さらに言うと、万が一ウォータートラップ内に水が残ったままだと、その水が何かの拍子に人工鼻の方に流れてしまい、人工鼻の内部が詰まってしまう可能性があります(人工鼻の内部は、加湿効率を高めるためメッシュ構造になっています)。また、自宅で使う場合でも、気管内に水が流れてしまうことを避けるため、

ウォータートラップは低い位置に置くようになっているため、「肩より高い位置にウォータートラップがある」こと自体が実はタブーな事なのです。

ここは、医療監修の悩みどころです。

医学的な正しさを優先するか、「実話」に合わせるか。

たまたま、医療機器監修をした方が鹿野さんご本人に関わっていたこと、在宅での人工呼吸器保守管理を担当していた方が私たち稲生会の患者さんもたくさんお世話になっている方だったことなどから、実際の鹿野さんの状況を聞くことができました。

「なんでこんな風にしてたんでしょうね？」と聞いたら、

「外すのめんどくさかったんじゃないですか？」とのお返事。

なんか、ものすごく納得してしまいました(笑)

これに限らず、鹿野さんご本人の写真が残っているものについては、たとえ医学的に正しく無くても、全てそちらに合わせています。

この映画の目的は、「医学的な正しさを伝える」ことではなく、「鹿野さんの生き様を伝える」ことだからです。

もちろん、写真に残っていない部分については、「医学的な正しさ」を押さえながら、当時の状況を可能な限り再現することを心掛けています。

当時の医学的なタブーに挑戦していった鹿野さん。

その生き様を伝える上で私のような医療者が邪魔をしてはいけません。

鹿野さんご本人の写真もたくさん残っているし、何より当時の鹿野さんご自身を知っている方々もたくさんいらっしゃり、撮影現場に来てくださった方もいました。

私のように、鹿野さんご本人を知らない立場で「医療監修」を行うことにおいては、「医学的な正しさ」を振りかざすことは厳に慎みました。

これは、映画の監修だけでなく、医療者として患者さんの在宅生活に関わる上でも同じく大事なこともかもしれませんね。

こんな風に、映画のキャストやスタッフが裏で鹿野さんと格闘していた様子が、映画の中で鹿野さんと格闘する登場人物たちと重なって伝わっていらしいなと思います。

<https://www.youtube.com/watch?v=hbQf-qh6678>

バナナ医療監修ウラ話 その2 「アンビュでカラオケかよ！」

予告編でもちらっと映りますが、鹿野さんがボラ(ボランティア)たちと一緒にカラオケで歌うシーンがあります。

実はこれ、僕たち医療者でもびっくりするような映像なんです。

何がびっくりって、「アンビューでカラオケかよ！」です。

アンビュー(バッグ)というのは、手動式の呼吸器のこと。アンビューというのは商品名で、一般名は「バッグバルブマスク」と呼びます。空気の入ったバッグを手で押すことで中に入っている空気を口鼻あるいは気管カニューレを通して肺に送る医療機器です。

鹿野さんのように気管切開をして人工呼吸器を24時間使用している人でも、現在ではお話しできる方はたくさんいらっしゃいます(映画の舞台となった1994年当時は珍しかったようです)。

人工呼吸器から送られてくる風で肺を膨らませ、それを気管カニューレではなく声門を通して口に吐き出すことで声を出します。

映画でも表現されていますが、人工呼吸器から送られてくる風が規則的(例えば1分間に15回の場合、4秒ごとに風が送られてくる)だと、それに合わせて声を出すことになります。慣れた人だと、呼吸器からの風と関係なく話せるようになるのですが、映画では気管切開をしてからあまり時間が経っていない設定だったので、まだうまく話せないという表現にしました(実は、時間経過とともにだんだん話すのが上手くなっているのですが、皆さん気づかれましたか?)

会話はまだしも、歌は「4秒ごと」の息継ぎではうまく歌えませんか。

10年程前から親しくさせて頂いている、鹿野さんと同じ筋ジストロフィー当事者である花田さんという方がアンビューを使ってカラオケで歌っているという話を聞き、とても興味を持って一緒にカラオケに行かせてもらいました。

実際に観たら、まあこれが、面白い面白い(笑)

歌っている本人も面白いのですが、横で一生懸命アンビューを押しているヘルパーさんとの組み合わせがまた面白いのです。

このときは花田さんが3曲続けて歌ったのですが、ヘルパーさんはもう汗だく。いくら慣れていると言っても、アンビューを押す両腕がぱんぱんです。

それなのに、なんと次は演歌のオーダー。しかもなぜか同じ曲が3つもオーダーされている! 映画の鹿野じゃないですが、「おいおい、もう勘弁してやってよ」と思っていたら、なんと演歌をオーダーしたのはそのヘルパーさんでした(笑) 同じ曲を3つも入れてしまったのは、操作方法がわからなかっただけでした。

ヘルパーさんが演歌を歌い始めると、とんでもない上手さ。ヘルパーさんの歌を聴きながら、なぜか悔しい表情をする花田さんがまた面白い。

その時に携帯で撮影した映像を、鹿野さんの役を演じた大泉洋さんに観てもらいました。もともと台本にカラオケのシーンがあったので、ぜひこのやり方で演技してほしいという思いもありました。

大泉さんはその動画をじっくり見てくださり、「面白いね～」とってくださいました。  
2週間ほど経って、そのカラオケのシーンの撮影日。

撮影前に、監修の担当をしてくださっていた助監督さんに「アンビュ、用意しておいたほうがいいと思うんです」と伝えました。助監督さんは「監督がそう言った？」との返答。「いえ、そうでは無いんですが、もしかしたら使うこともあるかなー」と伝えたとこ、「監督がそう言ったのでなければ、用意しなくても大丈夫じゃないですかね」とのことでした。

撮影開始直前、助監督の方が慌てて私のところにいらして、「先生！やっぱりアンビュ使うことになりました！」とのこと。理由を伺うと、「大泉さんが、土島先生が見せてくれたあの動画みたいな感じでやりたいと仰られているんです」。

大泉さんからの一言。

「あれ、なんかバカらしくて、好きなんだよね～」

さすが大泉さん！わかってるなー！！と嬉しくなりました。

さらにさらに、アンビュを押し役はボラの塚田君を演じた宇野祥平さん。僕も、絶対に宇野さんにやってほしい、と思っていましたが、大泉さんのご指名だったと聞き、さらに嬉しくなりました。

宇野さんにアンビュの使い方をお伝えし、いざ撮影開始。

皆さんご想像の通り、映画というのは、同じ演技を何度も繰り返し撮影するのです。

少なくとも4曲分くらい歌ったと思いますが、ずっとアンビュを押し宇野さんの両腕はぱんぱん。汗だくになった宇野さんが「もうー。誰か代わってくださいよー！」と叫ばれたのですが(もちろんアドリブ)、残念ながら映画のこのシーンでは声は聴こえないですね。そんな宇野さんの様子を見て他のキャストも大笑い。皆さん素晴らしい表情の映像になりました。

なんとか撮影を終え、宇野さんにねぎらいの声をかけようと思って近づくと、なぜかぱんぱんのはずの両腕でがっちり握手をされました(笑)やり遂げた思いが強かったんでしょうね。宇野さんの人柄が良く出ているエピソードです。

おそらく、医師の方々も、「アンビュでカラオケ」というのは観たことが無いと思います。もしかしたら、「誰だよ、こんな監修したの！」と医療関係者からお叱りを受けるかもしれないと覚悟しました。でも、実際にこうやって歌っている人がいる。たとえ医療者は観たことがなくても。それを知ってほしい。そんな思いでした。

幸い、今のところお叱りは受けておりません(笑)鹿野さんご本人がどうやってカラオケで歌っていたのかはわかりませんが、同じ筋ジストロフィー当事者で地域生活を送っている花田さんが実際にやっていること、それを鹿野さんに重ねたことは、鹿野さんも許して下さるのではないかと思います。

実際の花田さんの映像はこちら↓

ムービー「僕のおしメン」

<https://www.youtube.com/watch?v=X7SHLzIbGnA>

映画も好調のようで嬉しいです。

[https://news.biglobe.ne.jp/.../mnn\\_190107\\_8940244447.html](https://news.biglobe.ne.jp/.../mnn_190107_8940244447.html)

「もう観たよ！」という方も、ぜひ何度も観て頂き、色んな発見をして頂ければと思います。僕も、娘たちを連れて、また鹿野さんに会いに行きたいと思っています。

<https://www.youtube.com/watch?v=X7SHLzIbGnA>

## バナナ医療監修ウラ話 その3 「その顔、医者には見せてくれないのかよ」

今回の医療監修には、実際の鹿野さんの主治医であった、鈴木ひとみ先生が医療監修協力ということで関わって下さっています。

映画に出てくる原田美枝子さん演じる「野原先生」のモデルになっている先生です。

鈴木先生は、撮影中何回か現場に来てくださいました。

鈴木先生とのやり取りについては、大泉さんがインタビューなどでお話しされていますが、実際の鹿野さんの様子を鈴木先生から伺い、その直後に鹿野さんを演じることで、とても「不思議な感じ」がしていたそうです。

とくに、気管切開を迫られるくだりについては、そのときの鹿野さんの様子を詳しく聞いて、それをそのまま演技に反映させていました。

映画の撮影現場は、ものすごくたくさんのスタッフがいます。

例えば、病室のシーンで、演じるのが数名であっても、撮影、照明、録音、演出助手、メイク、衣装、美術、監修などなど、狭い病室にもものすごく多くのスタッフがいるのです。関係者とは言っても、実際の撮影現場を観ることは難しく、離れたところに置いてある「モニター」を通して観ることになります。

モニターを通して鹿野と野原医師のやり取りを観ている鈴木先生は、在りし日の鹿野さんと若き自身のことを懐かしく思い出されているようでした。

ボラたち(を演じる役者さんたち)と楽し気に話す鹿野(を演じる大泉さん)について、鈴木先生に

「実際の鹿野さんもこんな感じだったのですか？」

と聞いたところ、

「こういう姿は、見たこと無かったのよ。私の前では、こんな姿は見せてくれなかった」と、少し寂しそうにつぶやかれていたのが印象的でした。

医師として患者に向き合い、患者の生活まで考慮して医療を行っているつもりでも、患者の「生活」のすべてなど知ることはできません。

僕も医師として、何度も同じ思いをしてきました。

ただそれは、医師としての無力感につながるといったような感情ではなく、

「専門家として見る事ができているのは一部だけなんだ」

「自分たちには見えていない彼らの多様な『生活』や『人生』があるのだ」

という、まだ見ぬ秘境を思う探検家のような、ある種の嬉しさを感じさせるものなのです。

鈴木先生もきっと、そんな思いでご覧になられていたのではないかと思います。

ちなみに、わたくし土畠も、エキストラで映画に出演しています。

念のため言っておきますが、自分で出演したいと言ったわけではありません。むしろ裏方に徹していたと思い、最初はお断りしました。

前田監督から、

「関係した人に出演してほしいんですよ」

と言われ、その理由を伺ったところ、

「その方が、楽しいでしょ」

とのお答えを聞いて、

「そうか。その方が楽しいのか」

となぜか納得してしまい、指示通りのこのこと出演することにしました。

退院記念パーティーのシーンなので、スーツを持参してください、とのことだったので、普段着ている自分のスーツを持参しました。

危なく昔の氷室京介が着ていたみたいなジャケット(笑)を着せられるところだったのですが、無難な紺のスーツを持参したので、自前の衣装でOKということになりました。

稲生会の患者さん達もわかるような物を身に付けたいなーと思い、ゾウの模様のネクタイを選んだところ、衣装さんに「そのネクタイかわいいですね！」と言っていただきました(ただ、映画ではわかりません(笑))。

眼鏡は、現在使用しているものが「オシャレメガネ」(?)なのでNGということで、以前に使用していた普通の眼鏡を持参しました。現在のものとは度が異なっているので、なんだか撮影中は周りがぼんやりしていました。

エキストラなので、後ろの方に座っている人、というつもりだったのですが、なんと一番前の、メインキャストと同じ円卓に座ることを指示されました。

設定としては「病院の先生」とのこと。

自分としては、原田さん演じる野原先生が残念ながら出席できないので、「代わりに行ってきて」と言われた後輩の医師、という設定にしました。野原先生と違って外来主治医ではないので、入院中の病棟で、医者と言う事をあまり聞かなくて困るワガママな患者としての鹿野しか知らないドクター、ということにしました。

僕は演劇の経験などは無いので、撮影の際、同じ円卓におられた高村役の萩原聖人さん、貴子役の渡辺真起子さん、塚田役の宇野祥平さんに「こういうときってどうしたらいいんですか？」と聞きました。

萩原さんは「後ろでなんかやりたい気持ちもあるんだけどねー。あまり目立ちちゃうと、メインの役者さん(このシーンでは大泉さん)の邪魔しちゃうから、あまり派手に動かないようにしてるかな」と教えていただきました。

ということで、大泉さんの邪魔をしないように、必要最低限の動きしかしないようにしよう、と決めました。

実際、撮影が始まり、前述の「入院中のワガママな患者としての鹿野しか知らない医者」が先輩医師に言われたから仕方なく出席したという設定で鹿野のスピーチを聴いていたら、「入院中はワガママな患者としか思わなかったけど、その背景にはこんなことがあったのか」「この人の生活には、こんなにたくさんの人たちが関わっていたのか」なんて思ってしまう、自分が鹿野を「ワガママな患者」としてしか見ていなかったということを反省すると同時に、感極まって少しうろっと来てしまいました(決して演技じゃないです)。

せっかく素晴らしいスピーチをした後、鹿野はとんでもないことをしてかし、大変な事態になってしまうのですが、それはぜひ本編をご覧ください。

...と言ってたら、松竹のYoutubeページで本編が一部公開されていて、なんとその「一部」がこのシーン!!

ということで、いつでも映画出演している土畠をご覧くださいだけのシステムになっております。松竹さん、なぜにこのシーンなのか...

<https://www.youtube.com/watch?v=fPC9efxBDTY>

映画を観た知人からは、「大事なシーンで(土畠が)出てくるから気になって集中できなかった」というコメントを数多く頂いております。

最近では、もうそれを言いたいだけのためにSNS投稿する人も(笑)

まだご覧になっていない方は、こちらで予習してから映画を観ると、上映中に土畠が気にならずに映画に集中できるかと思われそうです。

映画「こんな夜更けにバナナかよ 愛しき実話」、まだ公開中ですが、少しずつ上映回数が少なくなってきました。

観客動員目標は100万人！とのこと、まだまだ多くの方にご覧いただきたいと思っております。

医療関係者の方も、きっと、医療者としての患者さんへの「眼差し」が変わるきっかけになる映画だと思います。ぜひご覧ください。

<https://www.youtube.com/watch?v=fPC9efxBDTY>

## バナナ医療監修ウラ話 その4(最終回)「大切なものは、目に見えないのかよ」パート1

今回の映画監修では、大泉さんをはじめとする俳優さん達はもちろん、監督や助監督、撮影・照明・録音・美術・衣装などなど、スタッフの方からも多くの事を学ばせて頂きました。

北海道大学でのロケの日、待ち時間に撮影監督(カメラマン)の藤澤順一さんが話しかけてくださいました。

藤澤さんは、これまでに60本以上の映画撮影を手掛け、2012年には「八日目の蝉」で第35回日本アカデミー賞最優秀撮影賞を受賞、2017年には紫綬褒章を叙勲されている、超重鎮のカメラマンです。

藤澤さんはいつも、ジーンズ生地のシャツにジーンズをはき、キャップをかぶり、皮の手袋をはめてカメラを持ちます。

段取り(撮影の前、一番最初に俳優さんやカメラの位置を決める段階)の際、監督が「こんな風に撮りたいのだけど、大丈夫ですか」と聞くといつも、「大丈夫」と一言。とっても洪くてカッコいいです。

せっかく話しかけて下さったので、藤澤さんの仕事について尋ねてみました。

まずは、どんな風にカメラの位置を決めるのか。

台本を読んで、ある程度は考えるけど、「基本的には現場」とのこと。

「監督が何を考えているのか僕にはわからないし、段取りのときに俳優の数や配置が変わることもある。それに合わせて、どうやって撮るかをその場で考える。だからこそ面白いんだ」

最近の撮影業については、あまりにも「職業化」されていると重鎮は嘆きます。

「自分が撮影した映像を、あとは編集スタッフに任せきりにして、ラッシュ(撮影した映像を編集せずにそのままつないだもの)を観ることもしない。それではいけない」  
映像を撮る上で大切な事とは、との問いには、

「撮る対象への愛」と「仕事を楽しむこと」

だと言います。

「それがあからこそ、この仕事をやれてるんだな」と。



深い深い、教えでした。

藤澤さんの教えではありませんが、今回の映画監修については、「映画に対する愛」を持ち、監修という役割を「楽しむこと」を意識していました。

僕はもともと、映画がとても好きでした。

浪人生のとき、予備校の授業の合間に、しょっちゅう映画を観に行っていました。最近はあまりありませんが、「二本立て」を6時間くらいかけて観たこともありました。

医学部受験を止めて、映画の仕事に就きたいと思ったこともあったほどです。

まさか自分が映画の製作に関わるとは、思ってもみませんでした。

おそらく一生で一度きり。

だったら、細かいところまで情熱をもって監修しよう、そして、なんでも楽しもう！そう思って監修をしました。

今回の監修のうち多くを占めたのが「筋ジストロフィーの身体の動き」、つまり大泉さんの演技の監修ですが、美術面についても医学的な部分は監修をしました。

映画の予告編にも出て来ますが、主治医の野原医師が鹿野に

「重症不整脈が出てる」「二酸化炭素が高すぎる。今でも十分、呼吸が苦しいんじゃない？」

と検査結果をもとに病態を伝えるシーンがあります。

不整脈の結果を伝えるシーンは外来が舞台なのですが、小道具として「カルテ」と「心電図」を用意しました。

カルテには、僕の直筆で、診療記録が書かれています。

それも、てきとうな内容ではありません。台本の内容に合うように、原作本に書かれている病態の変化と大きく違わないように、前回の外来診察時の記録を書いています。

映画を観た方はわかると思いますが、その記録には

「外出してジンギスカンを食べた際、便失禁あり」

と書いています。

もちろん、心電図についても、筋ジストロフィーでみられる「重症不整脈」の所見が出ているものを使用しています。

ただ、実際の映画には、それは映っていません。

「二酸化炭素が高すぎる」

という病室のシーンでは、小道具として「血液ガス分析結果のシート」を用意しました。

「二酸化炭素の数値が高すぎる。呼吸筋が相当弱ってる。今でも充分、呼吸が苦しいんじゃない？そろそろ人工呼吸器を着けるべきよ」という台詞があるため、それに合致するよう、

「動脈採血をして血液ガス分析を確認したら、意識レベルが低下しない程度の高炭酸血症が認められた」

ということにしました。大泉さんの右橈骨動脈に綿球をテープで止め、動脈採血後であることも表現しました。

血液ガス分析結果は、pH 7.325 pCO<sub>2</sub> 74.3mmHg pO<sub>2</sub> 68.7mmHgとし、血液ガス分析結果の用紙も縦横の長さを測って、それと全く同じサイズで小道具さんに作成して頂きました。

実際にそれを野原医師役の原田美枝子さんに渡し、段取りの時点ではその用紙に目をやったあとに台詞を言う流れになっていました。

ただ、本番直前に、原田さんが用紙は使わないことにしたとのこと。

それの方が、演技の流れがよいというのが理由でした。

つまり、外来のシーンでも、病室のシーンでも、用意した医学的な小道具は全くスクリーンに映っていないということです。

「せっかく準備したのに…」と言いたいところですが、演出を最後に決めるのは、俳優さんと監督の役目。美術や監修の役割は、スクリーンに映ろうが映るまいが、「そこにあるはずのもの」を用意することです。

映画完成後に、前田監督とその話をすることがありました。

その時に前田監督は、「スクリーンに映るかどうかは重要じゃない。そこにあるはずのものはそこに無ければいけない。たとえ用意したもののものが映っていなくても、それを本当の医者がどのように使ってそこからどのように判断しているのか、そういうことを知った上で俳優さんが演じることで『リアリティ』が出るかどうかが大きく変わってくる」と言っていました。

(続く)

## バナナ医療監修ウラ話 その4(最終回)「大切なものは、目に見えないのかよ」パート2

今回、監修最終日に、四名の監修者(介助、医療、医療機器、方言)に「寄せ書き」が贈られました。

寄せ書きといっても、色紙ではありません。スケッチブックです。

大きなスケッチブックを一人一冊、スタッフはもちろん、俳優さんも含めて、現場にいた全ての人からの寄せ書きと、監修者とスタッフが映っている写真がびっしりと貼られていました。

あれだけの激務の中で、全員の寄せ書きを集めて、さらに写真も…。

最後の撮影場所であった旭川から札幌に戻る電車の中でうっかりそのスケッチブックを開いてしまい、「なんて素晴らしい現場にいたのだ」と涙してしまいました。

スケッチブックの裏表紙には、前田監督のこんな寄せ書きがありました。

\*\*\*\*\*

たいへんお世話になりました。

監修・指導のワクを超えて、撮影現場になくはならない存在として、見えないところで映画を『生かし』てくださったことは、スクリーンに投影されます。

『大切なことは目に見えない』

映画を愛してくれてありがとうございました！

\*\*\*\*\*

実は、撮影中、前田監督とはほとんど言葉を交わすことはありませんでした。

忙しいだろうなと思っていたこともあったし、どんな方がよくわからなかったということもありました。

だから、自分がもともとすごく映画が好きだということはもちろん監督は知りません。

「せっかく検査結果用意したのに映ってないじゃないですか！」

とか文句を言ったわけでもありません。

でも、前田監督には、「見えて」いたのです。

そして、それが映画を「生かす」、「大切なこと」だということも。

仕事の対象を愛する。

情熱を持って取り組む。

多くの人の目には見えないことであっても、手を抜かない。

「大切なことは、目に見えない」

サン＝テグジュペリの小説「星の王子さま」の台詞のようですが、今回の映画監修を通して頂いた、大切なことばになりました。

映画の方は、まだ公開中ですが、少しずつ上映回数が減ってきています。

映画館のスクリーンで、「目に見えない」けれど「大切なこと」を、多くの人に知ってほしい。

そう願っています。